

# ミュージアム・レター

Gakushuin University  
Museum of History

# Museum Letter No.19

発行日 ● 平成24年(2012)4月5日

もくじ



ごあいさつ……1

出来事はどのように伝えられたか——「瓦版」から「新聞」へ……2

絵葉書の誕生……3

大正 いくつもの顔を持つ時代……4

明治の終わり・大正の始まり……5

写された大正時代……6～9

大正時代の学習院……10

◎学習院大学史料館のスタンプラリーに参加しませんか?……12

◎第67回史料館講座のおしらせ……12

◎展覧会参考図書のご案内……12



平成24年度学習院大学史料館常設展

大正の記憶—絵葉書の時代

## ごあいさつ

今日「絵葉書」として私たちが親しんでいるものは、旅先の風景や名所、美術館・博物館や展覧会の出品物の絵葉書などでしょう。また、花や猫などの写真、イラストレーターの作品も絵葉書として売られています。これらは、展覧会の絵葉書が会期と結びついている以外、特定の出来事との関係はありません。

ですから、大正時代(1912～26)の絵葉書には時事的性格のものが少なくないこと、それどころか、絵葉書は大きな出来事を視覚的に報道する最先端のメディアだったことを知って、私は非常に驚きました。皇太子(後の昭和天皇)の外遊や博覧会の開催などのめでたいことだけでなく、関東大震災のような大災害も絵葉書になったのです。誰かが絵葉書を買ひ、それを知り合いに送ることによって、起きたばかりの出来事の視覚的情報は速やかに広まったと思われれます。受け取った人々は、「百聞は一見に如かず」と、絵葉書に報じられた出来事を受けとめたことでしょう。

もちろん、「真を写す」と書く写真の絵葉書であっても、写真を撮る人、これを印刷し刊行する人がいる以上、絵葉書の画像は事実そのままではないはずで、そこには、作り手が意識していないものも含めてさまざまな「作為」が働いているでしょう。それを看破するのは専門家にも難しいとしても、写真や絵などの視覚的資料から過ぎし日を再構成するに際しては、視覚化にあたっての「作為」や「定型」への注意も欠かせないと思います。

大正期の絵葉書は今日のそれとは非常に異なる性格を有したわけですが、一方で、私がごく最近の現象と置いていたことが当時すでに行われていたというのも驚きでした。家族写真の年賀状です。もっとも、当時は写真館や印刷所などに頼んだであろうことが、現在ではパソコンとデジタルカメラさえあれば、自力で気軽にできるようになりました。

遠くも近くも思われる大正期の絵葉書の数々は、どのような時代のイメージを皆様にお伝えするのでしょうか。「大正の記憶—絵葉書の時代」展の開催にあたり、学習院大学史料館に絵葉書や資料を寄贈・寄託、あるいは貸与してくださった方々に、心より御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)

期間：平成24年(2012)4月5日(木)～6月9日(土)

日曜・祝日・5/15休館

特別開館 4/8入学式、4/15オール学習院の集い

時間：平日 12:00～17:00 土曜日・特別開館日 10:00～17:00

●入場無料

\*ギャラリートーク:4/15(日) 12:00～ 14:00～

5/12(土) 14:00～

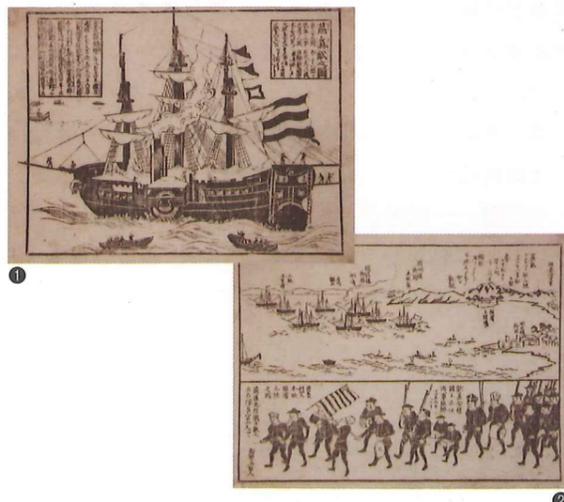
# I

## 出来事はどのように伝えられたか

かわらばん「瓦版」から「新聞」へ

現代の日本では、一世帯あたり平均して0.95部の割合で日刊紙が読まれていると言います。つまりわが国の大多数の家庭において毎朝、最新の出来事や情報がぎっしり詰め込まれた新聞が届けられるのは、もはや当たり前の日常です。ところで、政治、経済をはじめスポーツや展覧会に至るまで、様々な情報を安価に入手できるメディア＝「新聞」が、日本では明治維新後に欧米から新しくもたらされた文物の1つであったことは周知の事実でしょう。「新聞」という語の初出は、明治を目前にした1866年福沢諭吉著『西洋事情』で、「新しく聞き知った出来事」という意味をもたせた「News」の邦訳でした。

それ以前の日本には現代の「新聞」の代わりになる媒体はありませんでした。徳川幕府は何度となく出版統制令を出し、時事的な事柄についての報道を一切禁じていたからです。そうした中で、「瓦版」と称される一枚刷りの木版画が、政治的な内容以外、例えば地震や火事などの災害や、心中などの人情沙汰を伝えるメディアとして売られていました。現存する「瓦版」の最も早い例は、元和元年(1615)の大坂安部之合戦において豊臣方が徳川方に敗退したという大事件です。「瓦版」は速報性が売りであったため、彫りの質も決して良いとはいえ、摺りも墨一色という粗末な印刷で、版元もほとんどが定かでない非合法の出版物でした。しかし「読売」と呼ばれ、江戸市中や京、大坂で売られ



※所蔵表記のないものは当館蔵  
 ① 瓦版「蒸気船之図」(太田記念美術館蔵)  
 ② 瓦版「亜墨利加人本牧横濱上陸之図」(太田記念美術館蔵)  
 ③ 新聞錦絵「郵便報知新聞」開版挨拶(明治8年)  
 ④ 新聞錦絵「東京日々新聞四七二号・舟乗政吉」(明治7年)



て出回ると、それらが街道を通じて、出来事を日本全国に広めたのでした。

なかでも嘉永6年(1853)と翌7年の2度にわたる黒船来航は、現存するだけでも300種という多種多様の「瓦版」を生み出しました。それらを通覧すると、黒船の絵とその大きさを記したものの、ペリーの顔を描いたもの、浦賀沖や沿岸の様子を描いたものなど、多岐にわたります。しかし黒船の形はどこかおかしく、また、まるで鬼のように表わされたペリーの顔貌からは、初めて見る対象を限られた時間で何とか絵にし、その驚きを多くの人々に伝えなければ、という描き手の荒い息づかいが感じられます。

維新をむかえ、近代的な形態をもった日刊の新聞が初めて刊行されたのは、明治3年(1870)『横浜毎日新聞』で、その後『東京日日新聞』『郵便報知新聞』などが続々と創刊されました。ところがこれら当初の新聞は、挿絵もなく漢文漢語の読める知識人向けに書かれており、一般庶民には馴染めない内容でした。このような新聞と庶民との乖離をうめるべく明治7年から数年間発刊されたのが、「新聞錦絵」です。「新聞錦絵」は、江戸時代に庶民に親しまれた「錦絵」の形態を用いつつ、様々な出来事を伝える「新聞」としての機能をもつメディアでした。江戸と明治という時代の境界に生まれたこの文化的産物は、和と洋とが絶妙にミックスした独特の魅力をもっています。しかし、漢字にふりがなが付され、挿絵の入った「新聞」が普及するとともに、またたく間に衰退してゆきました。

今なお、出来事を伝える媒体は、変化し続けています。変化の早さや大きさばかりが目につきやすいものですが、一方で長きにわたって「変わらないもの」もあるように思います。本展を通じて、そのようなことも感じていただけるかもしれません。

(助教 鎌田純子)

# II

## 絵葉書の誕生

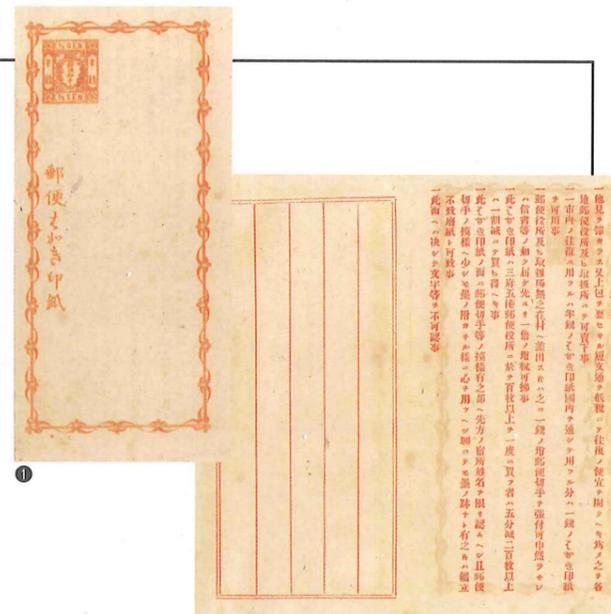
日本の郵便制度は明治4年(1871)より始まりまし。さらに同6年には、逓信省による「官製葉書」が誕生します。それまで日本の手紙の様式には、葉書という形態は存在しませんでした。郵便制度の産みの親である前島密は当時ヨーロッパで急伸していた低額の簡易郵便「ポストカード」が、郵便定着への決め手となると考え、葉書を購入して投函すれば、そのまま配達される「官製葉書」を導入しました。

制度としての「絵葉書」の始まりは、明治33年(1900)、郵便法規改正により「私製葉書」の使用が認められてからです。私製葉書の認可とは、紙に「切手」を貼れば郵便として、日本全国(あるいは外国にまで)届く、ということです。業者は葉書大の紙(約90mm×約140mm)に絵や写真を刷り込んで「絵葉書」として販売し、以後、デザイン性の高い絵葉書が数多く発行されるようになります。

日本最初の児童文学者として知られる巖谷小波は、絵葉書普及に大きな役割を果たした人でもあります。小波は私製絵葉書が解禁になる以前から、仲間達と官製葉書の裏面に絵を描いて送り合っていました。

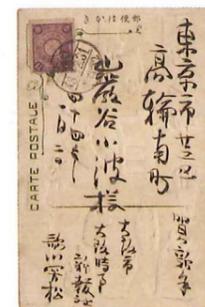


① 明治6年 二つ折葉書の表と中(切手の博物館蔵 大島正昭コレクション)  
 ② 明治29年 巖谷小波宛葉書  
 ③ 明治44年 黒田湖山差出 巖谷小波宛年賀状  
 ④ 明治44年 歌川国松差出 巖谷小波宛年賀状



絵葉書解禁の明治33年には、小波はドイツにいましたが、日本から送られた翌年の年賀絵葉書について、次のように評しています。

其次の年の年始状には、日本の絵葉書が山の様に舞い込んだ。然るに一々それを見ると、さりとてはお座の覚めた物計り。彼紅氈の余にも戯れて、日本の景色は富士山に限り、鳥は雀より他には無いのかと云われても、さて一言も無かった。



このように未熟な日本の絵葉書でしたが、明治35年、逓信省が万国郵便連合加盟25周年を記念して絵葉書を発行したところ、大評判となり、その後明治37-8年日露戦争が勃発すると、逓信省は戦況を「写真」絵葉書として発売、さらに民間では戦地へ送る絵葉書(例えば美人絵葉書など)も多種多様に作られ、大絵葉書ブームが到来します。

絵葉書解禁から10年後の明治44年巖谷小波宛年賀状の中には、現在の年賀状と同様に家族写真や綺麗な印刷絵葉書も登場しています。小波もさぞ満足したことでしょう。(学芸員 長佐古美奈子)

# 大正 いくつもの顔を持つ時代

大正時代は、15年という短い期間ですが、様々な出来事がありました。「大正デモクラシー」の名の下に「民衆の力」が強く意識され、藩閥による政治支配は揺らぎを見せて、政党政治が始まります。また、女性たちは権利の向上を求めて声をあげました。

第一次世界大戦は、日本に好景気をもたらしました。国内では文化の成熟や生活の洋風化が見られ、現代につながる生活スタイルが確立されます。「今日は帝劇、明日は三越」という言葉に象徴される華やかな大正文化を、人々は享受しました。

大正後期には、日本は戦勝国として国際聯盟に加わり、二十一カ条要求やシベリア出兵など周辺国との間には軋轢を招きました。国内では米騒動が発生し、戦後不況が始まります。関東大震災は不況に追い討ちをかけ、以後、徐々

に都市と農村の格差は広がり、社会運動が活発化しました。暗い世相があった一方、皇太子裕仁親王は欧州外遊、摂政就任など期待を集めつつ存在感を増していきました。

このように、いくつもの顔を持つ大正時代は、短くも光彩を放っています。

昨年当館では、この時代を振り返る『写真集 大正の記憶』(吉川弘文館)を刊行いたしました。今回、それをもとに当館が所蔵する大正時代の絵葉書を中心に同時代の写真などの資料を織り交ぜ、大正の様相を視覚的なイメージとして展示いたします。同時代人々が出来事をどのように見ていたのか、出来事はどのように伝えられていたのか、テレビ放送もインターネットも無い時代に、絵葉書などの紙媒体が果たした役割を考えます。

(文中・展示品中に登場する用語には差別的な表現がみられるものもありますが、歴史用語としてあえてそのまま使用しました。)



## III

# 明治の終わり・大正の始まり

### 明治天皇崩御

明治天皇は、日露戦争中の明治37年(1904)頃から徐々に健康を害しはじめ、同45年、高熱を発して昏睡状態に陥りました。宮内省からの病状発表があると皇族・華族、政府関係者らが参内し、また一般国民も皇居前広場に集合して回復を祈りました。いったんは小康を保ちましたが、ついに7月30日に崩御しました。61歳でした。

日本中が大きな悲しみに包まれる中で行われた大葬の礼(大正元年(1912)9月13日)は、初めて国民の前に明らかにされた天皇の葬儀でした。そして大葬は、当時の絵葉書や版画を見てわかるように、日本の近代化を牽引した明治天皇の姿と日本の伝統を直接結びつける役割を果たしました。

大葬の当日、学習院長であった陸軍大将・乃木希典は夫人と共に自決しました。乃木の死は、明治という時代が遠く過ぎ去ったことを象徴する出来事として多くの人々に受け止められました。



### 大正天皇即位

明治天皇は「大帝」のイメージをもって当時の人々には認識されていましたが、天皇・皇室は国民からはあまりに遠い雲の上の存在でした。

一方、大正天皇は、皇太子時代の明治33年(1900)から45年(1912)までの間に、沖縄を除く全ての道府県、そして韓国を巡啓して人々の前に姿を現しました。皇太子の巡啓に際しては、各地で道路や電灯の整備、鉄道の建設が行われ、近代化の象徴となりました。巡啓によって、日本全国で皇室の権威は高まり、また実態を伴った皇室の姿が一般国民の間に広まりました。新聞には皇太子が発した肉声(いまいごう)が掲載され、肖像は絵葉書になりました。絵葉書には皇太子だけでなく、節子妃(貞明皇后)や三人の皇子の姿も写され、近代的な家庭の姿として表されました。

大正4年(1915)の大正天皇即位大礼が一般国民も参加できる形で挙行されたことは、皇室と国民の接近をより明確に示す出来事でした。前近代の天皇はもちろん、明治天皇の即位も京都御所において「儀式」として執り行われました。しかし、大正天皇の即位大礼においては、京都で博覧会が同時に開催されたり、東京中に奉祝門が建設されて花電車が走ったりと、国家を挙げての「ページェント」(祝典)となりました。

また、大正天皇は、日本にとっての最大の同盟国であった英国との間で勲章や軍位の名誉称号を交換するなどして、西欧式の外交スタイルを積極的に取り入れました。

病弱な天皇というイメージばかりが先行しがちな大正天皇ですが、皇太子時代および即位から数年間は、「新時代を牽引する君主」の姿が当時の一般的なイメージでした。

(リサーチアシスタント 長谷川怜)



- ※所蔵表記のないものは当館蔵
- ① 明治45年 宮城前における忠烈なる国民
  - ② 大正期 明治天皇肖像
  - ③ 大正元年 大正天皇真影と大正改元の詔
  - ④ 大正4年 大正大礼記念

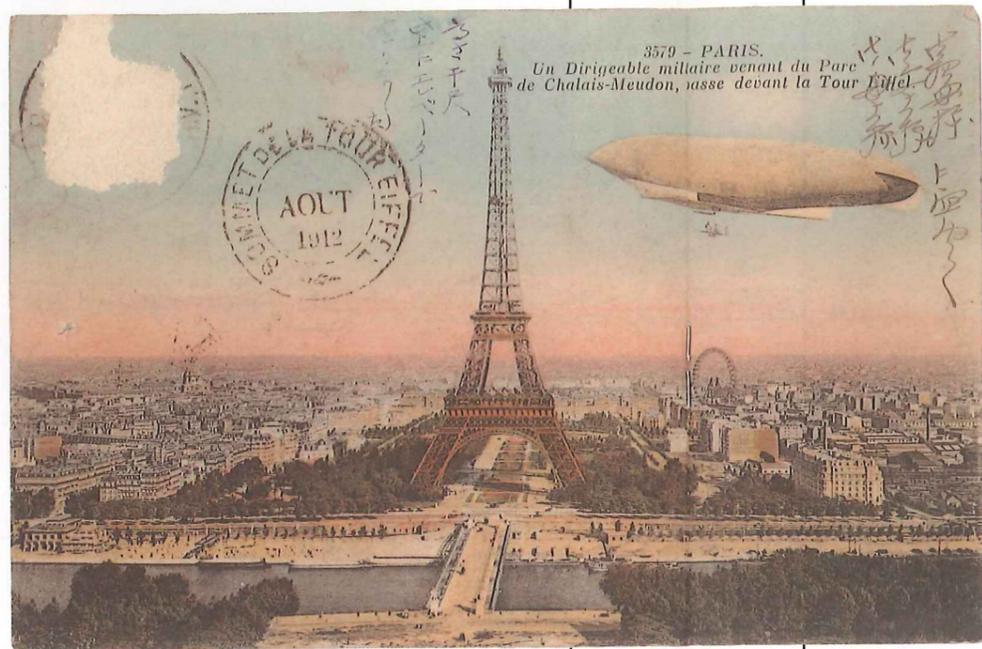
写された  
大正時代みしまやひこ  
三島弥彦とストックホルムオリンピック

明治45年(1912)のストックホルムオリンピックは、日本が初参加した大会でした。この記念すべきオリンピックに参加した選手が三島弥彦と金栗四三です。三島は100メートル走・200メートル走・400メートル走、金栗はマラソンにそれぞれ出場しました。2人とも残念ながら成績は振るいませんでしたが、日本のオリンピック史にその名前は刻まれています。

弥彦は学習院の出身で、東京帝国大学在学中に代表選手に選ばれました。大会の時の様子は、弥彦が現地から書き送った絵葉書で知ることができます。ストックホルムでは競技場の絵葉書を買って「此内で競走があるので。一回が四百メートル、四町もあります。見物人は五、六万人はいれます。此度は三十ヶ国来ます。人数は二千人以上…」と大会前の興奮を家族に宛てて綴りました。その後、競技に敗退した弥彦はデンマークを経てドイツ、フランス、イギリスを歴訪して帰国します。ドイツのハンブルクからは、「競走はとうとう敗けてしまいました」と報告する絵葉書を甥の通陽に出しています。

通陽は、日本におけるボーイスカウト運動を推進した人物として知られていますが、学習院在学中から絵葉書の魅力に取りつかれ、「ポスト・キング」というあだ名で呼ばれるほどの絵葉書収集家でもありました。それを知る弥彦は、各地で美しい絵葉書を買って、現地での所感や絵葉書についての説明などを様々に記して通陽に送りました。ヨーロッパの絵葉書は、印刷技術が高く美しいものが多いので、通陽にとって叔父である弥彦からの絵葉書は何よりの楽しみであったことと想像されます。

ヨーロッパから送られたこれらの絵葉書は、日本人初のオリンピック選手である弥彦の息遣いを今に伝



えると共に、当時、絵葉書が主要な情報伝達手段として機能していたことをあらためて思い出させます。

## 第一次世界大戦と日本

大正3年(1914)、ヨーロッパで第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に基づいて連合国側に立って参戦します。しかし、日本は西欧へ出兵したわけではなく、実際の戦闘は主に中国・青島のドイツ要塞が舞台となりました。人的・物質的損害をほとんど受けることのない日本は、戦争で生産力が低下した西欧に代わって輸出製品のシェアを拡大させ、国内は好景気に沸きます。

戦争の推移は、新聞や『欧州戦争実記』といった雑誌などによって国内にもたらされました。西欧から届いた写真や絵などもこれらの出版物に転載されました。

絵葉書には、この戦争で新たに登場した戦車や潜水艦なども描かれていましたが、圧倒的に多いのは戦勝記念・講和記念、あるいは戦勝祝賀パレードなどの絵葉書でした。戦闘や軍事ではなく、戦勝国としての日本=国際社会の一員になった日本、というイメージが絵葉書においては表現されています。これは、西欧で発行された絵葉書が戦争協力を国民に呼び掛ける「プロパガンダ」的要素を持っていたのとは大きく異なっています。日本における絵葉書の題材の偏りは、この戦争が大きな意義を持つものであるとは必ずしも主張できない性格のものであった事実を、示しているといえるでしょう。絵葉書に何が描かれているのかを見ることで、その当時の日本社会でその出来事がどのように捉えられていたのかを知ることができます。

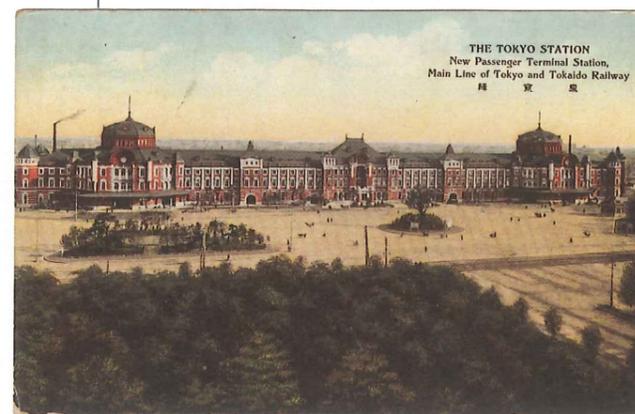
## 大正時代の東京

大正期の東京は、<sup>りょうらんかく</sup> 浅草十二階やお茶の水のニコライ堂といった明治以来のランドマークがそびえ立ち、銀座や日本橋には洋風建築が肩を並べて建つ、有数の近代都市でした。さらに、この時期には新たな建築が東京に姿を現しています。その代表が東京駅です。大正3年(1914)に開業した東京駅は2つのドームを戴く煉瓦造りで、「帝都」の表玄関に相応しい威容を誇っていました。フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテル、ビジネスと商業の複合した近代ビルの先駆けである丸ビルなどもこの時期の建築です。

しかし、これらの街並みは、大正12年(1923)の関東大震災で大打撃を受け、変容を余儀なくされます。浅草やニコライ堂は、まるで明治という時代が遠く過ぎ去ったことを象徴するように姿を消しました。当時の絵葉書には、明治末～震災前の、今は失われた東京の景観が写し取られています。こうした点で絵葉書は、失われた都市の記憶を伝える役割を担う重要なメディアであるといえます。

## 祝祭の帝都～花電車～

花電車—今はもうほとんど失われた文化でしょう。明治末に実用化がはじまった東京の市電は、普段は市民の足として活躍し都市の交通をますます便利にしました。いつもの市電は、祝祭の折には様々に飾り立てられ花電車となりました。その名のごとく花で埋め尽くされたものばかりでなく、台車の上に大砲の模型や人形を配置した特殊なタイプも作られました。夜にはイルミネーションで光り輝き、幻想的な雰囲気を現



出させました。街頭には花電車の姿を一目見ようと多くの人々が繰り出しました。

大正時代には帝都・東京において、<sup>てんちようせつ</sup> 天長節(天皇誕生日)、青島占領(世界大戦における勝利)、大正天皇即位大礼、世界大戦休戦条約成立祝賀会、明治神宮鎮座祭など数々の祝祭があり、花電車が運行されました。祝祭の終了と同時に花電車は姿を消し、東京は日常に戻りました。

花電車はエフェメラル(消え去ってしまう)な存在だったため、その姿を写した絵葉書の人気は高く、数多く印刷されました。



- ① 明治45年 三島弥彦より三島通陽宛 ストックホルムスタジアム (三島家蔵 尚友倶楽部保管)
- ② 大正元年 三島弥彦より三島通陽宛 エッフェル塔の前を通過する軍用飛行船(同上)
- ③ 1916年 [イギリスの戦意高揚]準備はいいか、カイザー(個人蔵)
- ④ 大正期 東京駅
- ⑤ 大正8年 皇太子殿下御成婚式奉祝花電車
- ⑥ 大正7年 鍋木清方「平和記念」(個人蔵)



### ひろひと 裕仁親王の欧州外遊

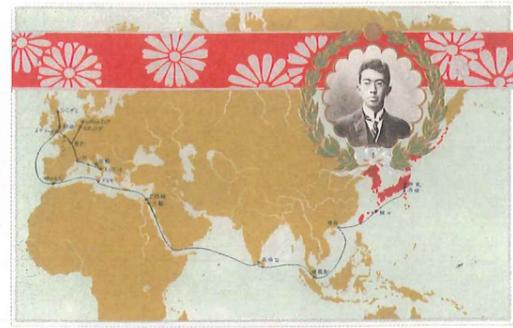
第一次世界大戦は、世界の勢力図を一変させる大事件でした。西欧世界は長く続いた戦争で荒廃し、世界に覇を唱えていたはずの英国の力は急速に失われ、一方でアメリカの影響力が大きくなりました。

日本においては、遠い西欧の戦争による損害はほとんど無く、むしろ産業発展の契機になりましたが、激変する世界の中でどのように地歩を築いていくかが重要な課題として示されました。また、戦争によってドイツやオーストリア、ロシア、トルコといった「帝国」が崩壊したことは、天皇制による近代化を進めてきた日本に大きな衝撃を与えました。この頃、大正天皇の体調は悪化の兆しを見せ始め、国民にもその様子は噂となって伝わりました。元老、政治家たちは皇室および国家の前途を心配し、皇太子裕仁親王への期待感を高めました。そして、次代の天皇となる裕仁親王に、世界基準の見識を身に付けさせることを目的とした外遊計画が山県有朋や原敬首相らによって発案されました。大正10年(1921)3月から約半年の外遊が始まりました。

裕仁親王は横浜を出港後、香港、シンガポール、コロンボなど英国植民地に寄港しながら英国に着くと、ポーツマスに上陸、列車でロンドンに至り英国王ジョージ5世と馬車に同乗してバッキンガム宮殿に入りました。そしてロンドン各地、オックスフォード大学、スコットランドなどを巡遊し、さらにフランス、オランダ、イタリアを歴訪の後に帰国します。

西欧列国の王室との交流を深め、また大戦後の西欧世界に触れたことで人間的に大きく成長した裕仁親王は帰国後の11月、摂政に就任しました。

この外遊は国内で大きな注目を集めま



した。新聞各社の写真班・活動写真班の同行が許可され、外遊の様子は密着取材という形で写真や映画となり、広く国民が目にするところとなりました。この時の写真は、当然ながら絵葉書となりました。皇室関係の絵葉書にはカラー印刷、エンボス加工など豪華なものが多いのですが、今回の外遊を写した絵葉書も、華やかな意匠で彩られたものばかりです。そして何より、裕仁親王の自然な振る舞いが鮮明な写真となって流布したことは、国民の皇室に対する親近感を喚起するとともに、皇室の権威を再認識させる契機となりました。

### 大正文化

「大正」と聞いてまずイメージするのは、デモクラシー、あるいはモダンな民衆の文化ではないでしょうか。この二つのイメージは密接に結びついて、大正文化を形成しました。明治の末から演劇や映画が流行し、また日本橋にはデパートが登場しました。都市の人々が謳歌した新時代の様相は「今日は帝劇、明日は三越」という言葉に集約されています。

こうした華やかな大正時代のイメージは絵葉書からも読み取ることができます。豊富な商品が描かれた三越の宣伝絵葉書、「文化住宅」と呼ばれる売り建ての洋風一軒家、ラジオの放送局や飛行機を写した絵葉書などは、大正期の新たな文化に対する人々の憧れを表しています。



- ① 大正10年 御同乗ノ英帝陛下ト東宮殿下(個人蔵)
- ② 大正10年 東宮殿下御帰朝紀念(渡欧順路地図)
- ③ 大正期 飯澤天羊「御細君閣下」
- ④ 大正12年 浅草公園十二階附近の惨状
- ⑤ 大正12年 本所被服廠跡の三万二千の焼死体の山
- ⑥ 昭和2年 大正天皇御大葬儀 御靈輿宮城二重橋出御新宿葬場殿に向はせらる

また、夫を尻に敷く妻の姿がユーモラスに描かれた絵葉書は大正時代に特徴的なものです。大正期における女性の地位向上を反映して、ここに登場する夫たちは頼りなく描かれていますが、こうした家事の分業によって案外円満な家庭が築かれていたのかもしれません。

これらの文化は「大正」の終りによって終焉をむかえるわけではなく、新たな時代である昭和に至ってさらに豊かなものとなっていきます。

### 関東大震災

大正12年(1923)9月1日、相模湾を震源とするM7.9の地震が関東一円を襲いました。死者・行方不明者約10万人、重軽傷者約5万人に及んだ関東大震災です。

この未曾有の震災の様子は、直後に絵葉書となって瞬間に各地に広まりました。当時の絵葉書を見ると、まだ煙を上げた建物や、壊滅した地域からの避難民が被写体となっており、発生直後に撮影された写真の多いことに気がきます。また、およそ絵葉書の題材としては適当でない、焼死体や怪我人が被写体になっていることもわかります。こうした、災害を写し撮った絵葉書は「使うもの」ではありませんでした。東京では新聞社が壊滅したため、新聞の発行は停止しており、編集や製本の必要ない、最も速報性のある「メディア」として絵葉書は活用されたのです。

報道のため被災地に入ったカメラマンは、被災民たちから冷たい視線で見られ、「写真を撮っている暇があるなら救助に参加しろ」と批判の対象となったそうです。しかし、大津波の襲来や巨大地震の再来、あるいは「朝鮮人」に関する流言蜚語が拡散する中で、唯一真実を伝えたのが写真であったこともまた事実です。有り合わせの紙に印刷した粗悪な絵葉書があることで、現代の私たちは関東大震災が発生した直後の様子を生々しく知ることができます。また、明治から震災以前にかけて形成された東京が震災によっていかに大きな変容を余儀なくされたのかを視覚的に認識することができます。



### 大正天皇崩御

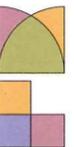
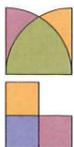
大正天皇は幼少の頃から病弱でした。成年した後は心身ともに壮健となり、日本全国を巡幸した時期もありましたが、即位後の大正9年(1920)頃から体調が悪化しはじめました。数年間の療養生活の後、大正天皇は大正15年(1926)12月25日、葉山御用邸で崩御しました。48歳でした。

昭和2年(1927)2月、大正天皇の大葬が執り行われました。輜車(天皇の霊柩を運ぶ車)は午後6時に皇居を発し、約2時間半をかけ新宿御苑の葬場殿に向かいました。長さ6キロ、約6000人の行列はさながら古典絵巻を見るようでした。新宿御苑での儀式の後、霊柩が東京府南多摩郡浅川町(現八王子市長房町)に造営された陵に納められると大葬は終了しました。

この間、新聞、絵葉書、そして新たなメディアであるラジオによって天皇の容態は全国に伝えられていました。天皇が崩御すると新聞各社は号外を出しましたが、新しい元号を「光文」と誤報する一幕もありました。

明治天皇の大葬の時とは異なり、葬場殿への一般国民の参拝とメディア取材が許可され、多くの写真が残されています。

(リサーチアシスタント 長谷川怜)



# V

## 大正時代の 学習院

明治10年(1877)10月に華族子弟の教育のための華族学校として出発した学習院は、同17年に宮内省管轄の官立学校となり、同18年には華族女学校が設置され、徐々にその規模と役割を充実させていきました。そして大正時代、改正された高等学校令に基づいて新たな学制や教課課程の改正が行われるなど、更に著しい発展をみるのです。

### 女子学習院の成立

大正時代にあった大きな出来事としては、まず女子学習院の誕生が挙げられます。明治17年(1884)4月に学習院が官立学校となった際、女子教育の官立学校新設が計画されます。同18年11月に学習院から分立する形で華族女学校が開校、校舎が四谷尾張町(現新宿区若葉町)に設けられました。その後、同39年4月に学習院学制が改定されたことで、再び学習院と合併して女学部となります。

そして大正7年(1918)9月に高等学校令が改められたのに従い、学習院学制も改正されます。この時、学習院女学部は、女子学習院として青山の新校舎(現明治神宮外苑)で再び独立しました。11月14日、貞明皇后の行啓を仰いで開院式が挙行され、令旨と記念品を賜ります。なお、開校記念日は従来通り華族女学校開校式が行われた日である11月13日とされ、毎年記念日には祝賀式が行われました。また、大正時代を通して卒業式には貞明皇后の行啓があり、卒業生には記念品が下賜されました。

女子学習院では、こうした恒例の儀式的のほかに、皇室の御慶事の際には祝賀式を行ない、記念品を献上しています。同11年4月12日にイギリスのエドワード皇



太子が来日した際も、歓迎の意を表して「四季之花」という献上絵巻物4巻を製作しました。これには学生たちによって、日本固有の花草75種と、それに関係の深い鳥類昆虫類18種、日本の伝統的造形物である鳥居や八橋、鳴子などが描かれました。同年4月13日、赤坂離宮において、エドワード皇太子に絵巻物が献上されました。

### 皇族就学令の制定

学習院が皇族の教育機関として機能するようになったのも大正時代でした。これまで皇族の就学についての規定はなく、皇族は慣例として学習院に通学していました。しかし皇族の増加に伴って皇族就学に関する規定制定の必要性が生じます。大正15年(1926)12月に皇族就学令が公布され、ここで初めて、学齢に達した皇族の学習院・女子学習院への就学が定められたのです。皇族男子は、同2年4月に完成していた皇族学生のための別寮(皇族寮、現東別館)に寄宿しました。

この別寮は関東大震災の激震を乗り越え、現在も学内に静かに佇んでいます。



### 学生海外見学旅行の実施

いつの時代も学生たちが楽しみにしている学校行事と言えば、修学旅行でしょうか。学習院では大正7年(1918)から夏季休業を利用して海外見学旅行が実施されるようになりました。旅費は行き先によって異なりますが、多い場合は1名につき300円程度、少なくとも170円程度を要したといえます。ちなみに当時の学習院の初任教授の月給は150円程でした。

旅行の行き先は、中国や満州、朝鮮、台湾などです。日本は明治38年(1905)の日露戦争勝利によって南満州鉄道をはじめとする数々の利権を獲得、さらに同43年には韓国を併合し、積極的に大陸進出を行っていました。将来、帝国大学や士官学校に進学し日本の行く末を担う人材になるであろう学習院の学生たちは、この旅行の中で日本の大陸政策の現場を見学してまわ

りました。

『学習院輔仁会雑誌』には、大正7年7月17日神戸港を出発してから8月14日下関に到着するまでの学生たちの日記が掲載されています。青島を訪れた際のある学生の日記には、「日本帝国に対して此地の如何に重要なかは言を俟たざる所であるが、(中略)必ず我が国防上青島の如何に解決せらるかは何人も当然思考すべきことにして又将来の我国運に影響の最大である事を忘れることは出来ないのである」とあり、学生たちの国政への強い関心と、青島領有への高い意識が感じられます。

しかしその一方で、「西瓜等は如何にも美味しさうに見えて渴してる我等はつひに我慢しきれず、大きな奴を買って食ひ」という場面もあり、食べ盛りの学生らしい一面を感じさせてくれるのです。

(PD共同研究員 橋本佐保)

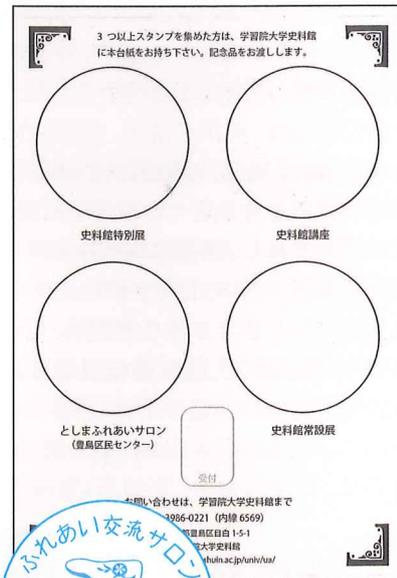


① 大正11年 女子学習院幼児学生より  
英国皇太子殿下へ献上したる絵巻物  
② 東別館(旧皇族寮 2010年撮影)  
③ 大正7年 女子学習院絵巻書  
④ 大正7年 第一回海外見学旅行  
駐北京日本公使館での記念写真

## 学習院大学史料館のスタンプラリーに参加しませんか？

当館では、当館開催の展覧会(年2回)、講座(年3回)、としまふれあいサロンでのミニ展示(年1回)を巡るスタンプラリーを開催しています！

特別展・常設展・講座・ふれあいサロンの4箇所のうち3箇所でスタンプを集めていただいた方には記念品を差し上げています。



### 史料館講座のお知らせ

## 第67回史料館講座

日時：平成24年5月26日(土) 14:00～16:00

講師：宮内庁書陵部 編修調査官 梶田明宏氏

「グラン・ツール1921

—皇太子裕仁親王の御外遊と国民の物語」

宮内庁書陵部編修課主任研究官 内藤一成氏

「ある貴公子の肖像

～三島通陽関係文書を手がかりに」

\*会場：学習院創立百周年記念会館正堂

\*入場無料・申し込み不要

### 展覧会参考図書のご案内

## 『写真集 大正の記憶—学習院大学所蔵写真』

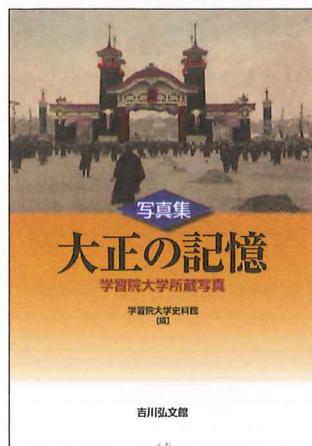
大正天皇の即位や裕仁親王(昭和天皇)の立太子、関東大震災…。 “大正時代”を写し撮った第一級資料。豊富な写真でいま甦る。

学習院大学史料館編

吉川弘文館発行

2011年9月刊行

定価12,000円+税



ミュージアム・レター 第19号

2012年4月5日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>